

(続紙 1)

| | | | |
|--|--|----|--------|
| 京都大学 | 博士 (地域研究) | 氏名 | 近藤 有希子 |
| 論文題目 | 現代ルワンダの親密性 —継続する暴力下に生きる人びとの沈黙と応答能力の可能性— | | |
| (論文内容の要旨) | | | |
| <p>本論文の目的は、1990年代前半に深刻な紛争と虐殺を経験し、親密圏の大部分が破壊されたルワンダ農村社会において、現在、人びとが生存のための社会関係をどのように再構成しているのかを明らかにすることである。アフリカに限らず多くの紛争後社会では、対立した集団間の対話や罪の告白など、すなわち「語ること」によって和解の実現と共同体の再生が目指されてきた。それに対して本論文は、人びとの沈黙や語りえない情動が、どのように共生の実現を可能にしているのかを探究した。</p> <p>第1章では、本研究の背景と目的を示した。ルワンダでは、紛争後も続く権威主義的な国家体制のもとで、人びとは政権の弾圧を恐れて身構え、沈黙している。本論文は、人びとのそうした行為が相互の配慮や道徳性にもとづく親密な関係性の生起につながることを論ずるといふ、論文全体の見取り図を提示した。</p> <p>第2章ではまず、トゥチとフトゥというエスニック集団が植民地統治下で人種的な差異として構築された歴史を整理し、また、1994年の虐殺時にはトゥチとフトゥが一枚岩の集団として衝突したのではないことを論じた。さらに、虐殺が終結した1994年7月以降にも深刻な人権侵害がルワンダの国内外で継続してきたが、それを人びとは「戦争 (<i>intambara</i>) 」という語で指示し、認識していることを指摘した。</p> <p>第3章では、ルワンダの現政権が虐殺の直後から実施している国民の和解と国家の統合を目指す取り組みを概観した。政権は国内のエスニシティの存在を否定し、国民を一様に「ルワンダ人」に包摂するとともに、他方では「トゥチ＝生存者」「フトゥ＝加害者」という二元的なカテゴリーも強調した。そして、その過程で正統なものとして創出した「国家の歴史」に合致しない人びとの経験や語りを厳しく取り締まっている。人びとは「語ること」によって国家の暴力に曝されることを危惧して身構え、沈黙していることを記述した。</p> <p>第4章では、ルワンダ農村社会において人びとは土地をどのように獲得しているのかを分析した。現在、土地を売買する取引が増加し、世帯間の土地保有面積の格差が顕著になりつつある。しかし他方では、土地が無償で貸借されることで、保有する土地の面積が小さい世帯の生存が可能になっていることを明らかにした。</p> <p>第5章では、寡婦や離婚女性、孤児を対象として、生活空間がいかに共有され共食がおこなわれているのかを検討することを通して、親密な関係性がどのように構築されているのかを論じた。こうした関係の多くは、トゥチとフトゥという集団範疇の内部に存在していたが、他方で、家族の大半を失ったトゥチの人びとの困難に対して、フ</p> | | | |

トゥの近隣住民が内発的に応答するという事例も存在していた。これらから語りえない経験こそが、他者の困難への応答を導いていることを論じた。

第6章では、現政権が創出した「国家の歴史」が全国的に強調される「虐殺記念週間（毎年4月）」に、村で生じた出来事に着目して、公共空間において人びとが他者の痛みにかにどのように応答しているのかを検証した。「嘆くこと」を公的に承認された「虐殺生存者」は、公的な場でみずからの体験を語り、国家から家屋や補償金を配分されている。しかしこうした行為は、自己の経済的な利益を優先しており道徳性を欠くものと見なされる。大部分の村人は「国家の歴史」には回収できない個別の経験と記憶を保持しており、それは、身体化された記憶として表出される。それを感知した周囲の人びとは、共約不可能な個人の痛みに対する想像力を喚起されていることを論じた。

第7章では、軍隊に志願することを選択した農村の若い女性たちを事例として、人びとのあいだの葛藤を記述した。近年の農村では人口増加と土地の狭隘化によって耕作地が減少し、現金稼得の必要性が高まっている。彼女たちが軍隊を志願したことには、よりよい生活を求めて国家の方針に迎合する姿が見て取れる。それに対して家族や親族、恋人たちはときに強い反発を示し、ジェンダーや世代にもとづく道徳性を強調する。そこには、生存空間を守ろうとする個々人の切実な願いが存在していた。

結論となる第8章では、現代のルワンダ農村社会において、他者の痛みを想像し、それに応答する可能性は、「語ること」だけではなく、人びとの身構えや沈黙のうちにも存在することを論じた。彼らは、国家が要請する均質で画一的な市民像には、決して合致しない存在であり、「国家の歴史」からしばしば排除されている。しかし、彼らの相互行為には、複雑で多様な経験やかけがえのない記憶に対する想像力と応答性が示されており、そこには、人びとの生存の次元の公共性と呼べるものが見いだせると結論した。